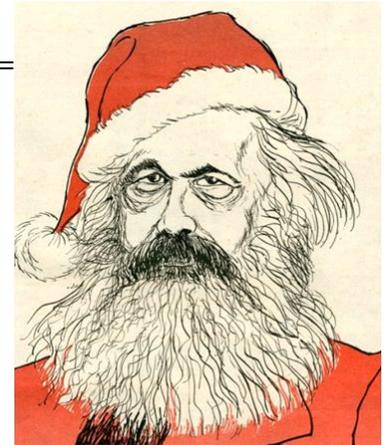


『資本論を読む会』第4回目の案内！

【第4回】2018年12月21日(金)午後6時から
会場:支局・社青同事務所において

◎**途中からでも、参加を歓迎します。**



11月29日(木)の第3回の「読む会」には、8名が集まりました。残念ながら日程の都合で参加できないという方もいましたが、今回は「第2節 商品に表された労働の二重性」(78-88p)を読み合わせ、Takさんのレポートに基づき質疑討論しました。当日のレポート、参考辞書、添付資料等は、支局のホームページに収めてあります。

◎ <http://socialistho.cafe.coocan.jp/>「資本論を読む会」コーナーにあります。

レポーターから

- 商品に含まれる労働の二重性は、マルクスが初めて証明し、これが跳躍点で、経済学の理解が可能になるのだから、この点を吟味する。
- 使用価値を生産する労働を「有用労働」と呼ぶ。種々の使用価値に応じて、種々に異なる有用労働の総体があり、それが「社会的分業」を形成する。
- 共同体内分業や工場内分業は商品に媒介されないから、社会的分業は商品生産の存立条件であるが、商品生産は社会的分業の存立条件ではない。商品となるは、「独立に分離した私的労働」の生産物だけである。だから、商品生産社会(資本主義)の成立には、①私的所有(独立・私的に行われる有用労働)、②社会的分業、が必要要件である。
- 他方、有用労働は幾千年前から行われ、「特別な人間的要求」に「特別な自然素材」を同化させ、今では、自然に存在しない上衣・亜麻布等の膨大な素材の富を生産している。だから、使用価値の形成者として、「有用労働」は、すべての社会形態から独立した人間の存立条件であり、人間の生活を媒介する「永久的自然必然性」(人間の本性)である。
- 自然に存在しない使用価値と言っても、その生産は、あくまで「自然がやっている方法で、素材の形態を変化させる」(自然科学の応用)だけであり、さらに、水力・馬力等の自然力を借りている。その意味で、有用労働は、使用価値・素材的富の唯一の源泉ではなく、「労働はその父であり、土地(自然の総称)はその母」である。
- 他方、「価値」を生産する労働は、労働の「有用労働」の面を見ないとすれば、残るのは「人間労働の支出」ということであり、商品価値は、人間労働一般の支出を表している。
- この労働は、普通の人間の「平均的な単純な労働力の支出」であり、国・文化時代で変化はするが、一定社会内では与えられている。複雑労働は複合された単純労働に整約される。だが、この整約は、生産者の背後の流通・労働市場で決定されるので、生産者は慣習で決まると思いこむ(勘違いする)。以下の研究では、単純労働を前提にする。
- 価値は、「抽象的人間労働」という同じ「質」で、その労働時間で表される「量」をもつ。
- 「生産力」とは、常に「有用労働」(使用価値)の生産力で、その増減に比例して、その源泉である有用労働の量と、使用価値の量も増減する。しかし、抽象的労働は時間で測られるから、生産力がどう変化しても、同一期間(時間)に常に同一の価値しか生まない。一定期間に、生産力増大で使用価値が膨大に増加しても、価値量は変わらない。
- また、生産力(労働の生産度)が増大して使用価値量が増加する場合に、もし生産に必要な労働時間の総計を短縮するならば、この増大した使用価値総量が持つ、価値量は減少する。
- 全ての労働は、生理学的意味における人間労働の支出である。そしてこの「同一の人間労働、または抽象的に人間的な労働の属性」で労働は、「商品価値」を形成し、この「具体的な有用労働の属性」において、「使用価値」を生産する。

※「使用価値・価値規定」を終え、次からは「価値形態」です。少し楽になるはず・・・

◎参加希望の方は、できれば事務局または発起人にまでご連絡ください。
※資料コピーの関係がありますので・・・